

文芸特集



たくさん作品の中から選ばれた秀作の一部を紹介します。限られた字数の中に織り込まれた、さまざまな思いや季節の情緒を味わってみてください。

一席

断捨離をする程持たぬ服なれど母の形見も捨てられず居る

安行吉岡 會澤 光子

評 近頃、断捨離とか終活の言葉が短歌にも違和感なく使われるようになった。作者は母の形見の衣服をもう着ることがないだろうけれども、捨てる決心がつかずにいる。その形見の着物に作者の母を想う心が投影されている。

山ほとにケヤキの枯葉が積れり忍者のように少年もぐる

芝高木2 森田富美子

「しなければ」の心少し脇に置きゆつたり散歩川沿い七〇〇歩

坂下町3 川名 佳子

縁ありて来しキューポラのある街へ十八年目の桜を仰ぐ

領家3 中川 弘子

絵手紙と俳句を競いて亡夫と我共に過せし部屋の温もり

差間 中田 道子

葉に戻るカラスの声ののんびりと落ちる夕日に呑み込まれいく

安行原 高橋 清

癌手術終えたる妻と命あること喜びておせち祝えり

安行原 山田 英一

病得て寝息うかがう夜もあれど今年の桜も二人で眺め

幸町1 保坂 治代

不意にきたチヨコレートケーキ手土産に十分で帰る我が息子なり

上青木1 高橋 和江

擦り切れしキルトの半纏手放せず起き抜けに着る冬の台所

上青木3 岩崎モト子

冬晴れに土手の散歩に歩みゆく川面の風がわが身にふわり

並木元町1 詔石 麗子

俳句

一席

睦まじく競ふやうにも吊し雛

上青木1 鈴木 千鶴

評 吊し雛は諸説あるが、桃の節句の祝いと厄除けを願い作られたものである。赤い糸に吊るされた人形は、色鮮やかで形も様々である。睦まじくもあり、競い合っているようにも見える。不穏な今日、心が癒やされる光景である。

ふるさとの桜は母の息づかひ

小谷場 宗像とき子

戒名に寿と云ふ一字春うらら

上青木西2 大滝 徳美

水門に潮の香りや八重桜

芝富士1 流 美弥子

早晩の桜見たさにしのび足

西川口3 早乙女文子

薄紙をときて雛の気品かな

安行領根岸 田中 幸子

一步より始まる未来青き踏む

源左衛門新田 佐藤 都

代田青真白き雲も流れけり

芝富士1 小野 隆子

三方に真清水分かれ田は緑

川口1 小安 章代

トラツクの上の服垣手入れ

本町3 長谷川恵美子

仏の座すつかりこの地の人となる

安行領根岸 小林 茂

寒桜撮つてとばかり枝垂れて

芝富士2 推名 菊江

コロナ禍で偶然みつけた遠花火

新堀 小澤富美子

一席

生かされる今に冥加の掌を合わせ

鳩ヶ谷本町3 加藤 レイ

評 大正、昭和と潜り得た作者の生活理念。感謝と丹精の二語に尽きるのである。平成を踏まえ、令和の更なる念へ折しも深い。

人はだれも自分探しの旅人か

飯塚2 川瀬伊津子

博学の知識代行するスマホ

東川口2 星野 直康

見返りを求めぬ母のたなごころ

上青木西4 星野 良一

リハビリに耐える姿に明日が見え

戸塚境町 稲垣 洋

葉より子供泣き止むおまじない

上青木4 星野 明美

すき焼きの主役玉ねぎやもしれず

領家3 中川 美穂

川柳

新井 愁思 選

人はだれも自分探しの旅人か
 飯塚2 川瀬伊津子
 博学の知識代行するスマホ
 東川口2 星野 直康
 見返りを求めぬ母のたなごころ
 上青木西4 星野 良一
 リハビリに耐える姿に明日が見え
 戸塚境町 稲垣 洋
 葉より子供泣き止むおまじない
 上青木4 星野 明美
 すき焼きの主役玉ねぎやもしれず
 領家3 中川 美穂